

なお「男性の壁」女性議員の層厚くしないと



1967年生まれ。専門はジェンダーと政治、福祉国家論、ケアと民主主義論。著書に「さらば、男性政治」（石橋湛山賞）、「私たちの声を議会へ」、編著に「日本の女性議員 どうすれば増えるのか」など。

自民党が大きく議席を減らしたのは、やはり真金問題や旧統一教会（世界平和統一家庭連合）の問題がきちんと総括されないことへの不満が強かったということでしょう。誰が総裁であっても、結果はあまり変わらなかったと思います。

石破茂さんへの支持が急速に失速したのは、これまでの自民党とは違う路線になるのではという期待が早々に裏切られたからでしょう。総裁になる前と後で主張が変わり、「ぶれ」が目立ちすぎました。

では、高市早苗さんが総裁になっていたらどうだったかというところ、右に振られていくから、自民党に批判的な人はさらに離れてしまう。特に中高年の女性有権者は、平和への志向が比較的強いので、高市さんとは相性が悪い。高市総裁でも、やはり自民は負けていたと思います。

立憲民主党は議席を大きく増やしましたが、国民民主党やれいわ新選組も伸びました。自民以外であれば政権批判票の受け皿になったという感じで、立憲の野田佳彦さんが強い支持を得たわけではないでしょう。今回の選挙が、政権交代が起こった2009年の選挙と異なる点は、当時の民主党にははっきりしたメッセージがあったことです。子ども手当など有権者にアピールするマニフェストがありました。今回は野党のビジョンがよく見えませんでした。

立憲は、野田さんが代表になって中道保守にシフトしたため、政党の性格がいまいになりました。枝野幸男さんが党を立ち上げたときには、「立憲主義を守る」という旗がありました。いまの立憲にはそうしたものがない。ビジョンを競う選挙にはならなかったと思います。今回の選挙では、女性候補者が過去最多の314人で、当選者も最多の73人と09年衆院選の54人を超えました。ひとまず良かったと思います。

「男性政治」からの脱却は、1回の選挙でどうなるものではないのですが、与党が大きく負けた時のほうが、女性議員は増えやすいんですね。野党はチャレンジャーなので新人を立て、女性が入ってきやすい。最近では、女性候補者ももっといた方がいいという世論の後押しがある

選挙では、トップ当選する女性も多い。守旧派の男性候補より、女性の方が違うことをやってくれそうだという期待があるのでしょう。

とはいえ、男性政治の壁はまだまだ健固です。新人女性議員が増えても、次の選挙でも議席を維持するのは大変です。09年の衆院選では、女性議員は11%超にまで増えましたが、12年の選挙では7%台まで減ってしまっただけです。国会では、当選回数を重ねないと影響力を持ちにくいので、女性議員の層を厚くして、政治のキャリアを積むための「パイプライン」を太くすることが必要です。高市さんのように首相の座に近づける人がいても、女性政治家のパイプラインが細いままでは、後に続く人が出てこない。男性政治の壁は崩せないのです。

今回、野党は議席を伸ばしましたが、それぞれの野党のビジョンが明確でないし、立ち位置もわかりづらなっています。そういう意味では混乱の時代になっていくと思います。

これから野党に求められるのは、何のために、また誰のために政治をやっているのか、どんな社会を目指すのかについて、メッセージを明確に打ち出すことです。

たとえば選択的夫婦別姓は、国家や家族のあり方と密接に結びついています。野党は、反対する自民の保守派がよって立つ国家観や家族観に正当性があるか、正面から問うべきなのです。「働く女性が増えて姓を変えらるるコストがかかる」という、功利主義的な理由に頼るのではなく、自らの家族観やジェンダー観にもとづくトータルな政策を提示すべきでしょう。

野党の議席が増え、発言力が高まれば、よりリベラルな政策が進むという単純なことではありません。23年に成立したLGBT理解増進法は、与党が国民民主と日本維新の会を丸のみしたことで、かえって内容が後退してしまいました。

民主主義では、各政党が価値観や理念を明確にした上で、有権者が選択することが必要です。違いも明確でないまま、ただ議席の数だけを争っても、政治がよくなるとは思えません。